

平成22年度甲子園監督研修報告

常任理事 寺澤 誠一



1. 期間

平成22年8月9日(月)～11日(水) ー2泊3日ー

2. 場所

阪神甲子園球場(兵庫県西宮市甲子園町)

つと
津門中央公園野球場(兵庫県西宮市津門住江町)

3. 内容

9日	試合視察	北 照	ー	長崎日大
		旭川実業	ー	佐賀学園
10日	オーダー交換・応援指導			
		いなべ総合	ー	福井商業
	試合視察	砺波工業	ー	報徳学園
		いなべ総合	ー	福井商業
		明德義塾	ー	本庄第一
		鳴 門	ー	興 南
	練習視察	鹿児島実業		
	球場施設・設備見学			
11日	試合視察	延岡学園	ー	大分工業

4. 参加者

吉田	育弘(北信支部)	長野俊英高校)
小山	英樹(東信支部)	丸子修学館高校)
甕	力(南信支部)	箕輪進修高校)
菊池	吉真(中信支部)	松本美須ヶヶ丘高校)
寺澤	誠一(責任者)	県連盟常任理事)



長野県高校野球の競技力向上の一環として、若手指導者の育成を目的に平成10年から始まった甲子園指導者研修も今夏で13回を数え、本県連盟の事業の一つとして定着した感がある。

今回は、秋季長野県大会へ向けて四支部で予選会のシードを決める予備戦の最中でもあり実施が危ぶまれたが、各支部より意欲あふれる4名の参加者を得て記録的な猛暑の中、熱戦の続く甲子園球場を中心に二泊三日の研修を行うことができた。

昨夏まで大会本部役員としてお忙しい中、何かとお世話頂いた奈良井常任理事にお目にかかれないことは大変残念ではあったが、昨年に引き続き、井本 亘日本高野連主任の案内で、インタビュー通路に新設置された部屋で行われた、いなべ総合と福井商業のオーダー交換や応援責任者への本部役員による指導の場に立ち会うことができた。また、第四試合開始後には新装成った両室内練習場と選手入退場通路、試合終了後は三塁側ベンチの見学をすることもできた。三塁側ベンチには冷房装置が設置され、3年前の研修で入った時とは随分様子が違って驚いた。

甲子園研修の責任者を任され、今夏で22名の指導者のお世話をする機会を得た。研修に参加した指導者が率いるチームの活躍を耳にし、目にするにつけ、本研修の意義を改めて実感し、次年度以降の実施に向け更に一層の充実を図りたい。



平成二十二年度監督研修報告レポート

長野俊英高等学校野球部顧問 吉田 育弘

一、はじめに

この度、監督研修ということで甲子園へ行って参りました。そのときに感じたことや考えたことを拙い報告ではありますが、レポートにまとめたいと思います。

二、甲子園

近年リニューアルをした阪神甲子園球場。まだ鶯の生えきらない正面を見つつ、甲子園入りをしました。遠くからでも聞こえるアルプススタンドの応援。階段を上り、グラウンドを見渡せる位置に立ったとき、言い表し難い興奮を感じました。甲子園には初めて来たわけではありませんが、あの夏の大会独特の雰囲気。アルプススタンドやグラウンドでプレーする選手達…球場の外とは別世界に来たように感じました。

今回は監督研修ということで、普段は目にするのでできない場所も案内していただきました。試合前のトスでは高野連の方から長野大会と同様の注意に加えて「県の代表として甲子園に来ている。いつも応援してくれる人たちの思いを背負って試合をしてほしい。」「謙虚さを持って試合に臨んでほしい（特に必要以上のガッツポーズ）。」などの指摘がありました。特に印象に残ったことは「飲み残しをグラウンドに捨てない」という一言でした。普段は何気なくやってしまうことですし、注意をすることも少ないかと思います。全く想像していなかったことを聞いて普段の練習でもこれくらい気を遣わなければいけないな、と感じました。

また、テレビでよく映し出されるグラウンドから坂になった廊下を登ってくる場面。そのあと選手はインタビュー、ストレッチを終えて球場をあとにするのですが、一連の動きがスムーズに行われており、テレビ中継を見ているだけではわからない部分を知ることができました。

今回、球場を見せていただいた中で一番印象に残っているのは三塁側のベンチです。大会4日目、鳴門高校対興南高校のあとに三塁側ベンチに入れていただきました。ベンチから見たグラウンドは広く、観客席はとてつもなく大きく見えました。こんなところで野球ができれば幸せだろうなあ、と心から思いました。

三、出場校の練習

鹿児島県代表の鹿児島実業高校の練習を見せていただきました。二時間の練習のうち見学した時間は一時間ほどではありましたが、アップ、キャッチボールを終わらせたあと、シートノック、ランナー、二塁でのバッティングと走塁練習を見ることができました。走攻守のレベルが高いのはもちろんですが、きびきびとした動きが印象的でした。また、鹿児島実業は挨拶が気持ちよくグラウンドに向かう気持ちがよく現われていました。「高校野球は教育の一環」とはよく言われることですが、挨拶や礼儀など毎日のことが当たり前に行えるようにしなければ…と再認識をしました。

四、試合について

どの試合も甲子園にふさわしくレベルの高いものでした。春夏連覇を目指す興南高校の島袋君のストレートはすばらしかったですし、明德義塾の座覇君の放った代打ホームランも見事なバッティングでした。

甲子園に来るチームの特徴かもしれませんが、「走塁のうまいチームが多い」ということが言えると思います。二死一、三塁のセンター前ポテンヒットで一塁ランナーが生還しましたし、少しでも隙が見えれば常に先の塁を取りに行く、という姿勢が一貫しているように思いました。もっとも、走塁にスランプはありませんし、相手にプレッシャーを与えるという点において走塁が一番大きな武器なので、必然的に走塁のうまいチームが勝ち残るのかもしれませんが。

技術的な部分ではありませんが、初出場のいなべ総合高校の横断幕には「人間力で勝て」と書かれていて、監督さんの指導方針がよくわかりました。同じく初出場の砺波工業高校は一塁側内野席まで応援団が溢れ、一投一打に観客が魅入っており、地域の期待の大きさを感じました。両チームとも一回戦で敗れてしまいましたが、アルプススタンドとベンチが一体となり、素晴らしい試合でした。

五、まとめ

甲子園ではいろいろなものを見せていただき、とても勉強になったのですが、ただ一つ残念なことはスタンドの「ゴミ」です。三塁側ベンチから外野スタンドを見るとゴミが一面に散乱していました。同行の先生方とも話をしたのですが、あのゴミをだれが拾うのか？どれだけの時間がかかるのか？あの素晴らしい環境にゴミが散乱している景色は非常に不快感を抱きました。生徒達は勝利を目指して一生懸命にプレーをしています。そんな場所であるからこそ、観客は自分が出したゴミは自分で持ち帰るという人間として基本的なことを徹底できれば…と思いました。

高校球児は誰も甲子園に行きたい、と思っています。しかし、個々の力の差はありますし、チーム力の差もあります。当然、ほとんどの高校球児は甲子園の土を踏めずに高校三年間を終えていきます。そんな中でも甲子園を夢見て仲間と共に一生懸命野球に取り組むことはどんなことよりも価値があると思います。そして、一番大切なことは三年間の高校野球生活でいかに自分が変わり、成長したか、ということだと思います。今回の甲子園研修の中で選手達を見ていてそう感じました。自分のチームに戻っても、どんなときも諦めず、ひたむきに野球に取り組もうと思っています。

最後になりましたが、長野県高校野球連盟会長安藤善二先生を始め諸先生方、並びに今回引率としていろいろなことを手配していただいた寺澤誠一先生に御礼を申し上げレポートとしたいと思います。

平成 22 年 8 月 26 日

平成 22 年度 甲子園研修レポート

丸子修学館高等学校
野球部顧問 小山英樹

1. はじめに

今回の甲子園研修では、甲子園でしか経験・勉強できない事が多くその一つ一つが私にとって大変貴重なものとなった。甲子園の雰囲気、応援の熱気、グラウンドでプレーしている選手の表情、全ての事が初めての事であった。いちばん強く感じたのは選手権大会を運営・支えてくださる人の多さである。もちろん選手の技術的な面でのレベルの高さも非常に多く学んだが、「大会でプレーをする事は、大会を支えてくださる人達がいて初めてできる」という事を丸子修学館高校野球部で指導しているので、今回はそのことを主に報告する。

2. 運営・支えてくださる人々

甲子園研修で選手権大会の運営を見学させていただいて本当に勉強になった。チームが甲子園に出場し、その応援に来ただけではわからないところを本当に多く学ばせていただいた。日本高野連、審判団、阪神園芸、球場職員、報道陣等多くの人たちが選手権大会に関わっているという事を一番初めに感じた。特に地方大会では考えられない報道陣の多さには驚いた。高校野球が他のスポーツと違い多くの人に注目されているのだと改めて感じた。

また、日本高野連の方々が大会を運営する一部を見学させていただいた。選手・報道陣の誘導、トス、応援責任者との打ち合わせ、スケジュール管理、どの仕事も地方大会とは比にならない程の緊張感・責任感を感じた。応援責任者との打ち合わせを見学させていただいた時、地方大会ではほとんど見ない光景があった。「エール交換の有無」の確認である。役員の方が説明してくださったが、甲子園では観客が多く非常にざわついているのでエールがお互いに聞こえにくいという事であった。その後スタンドでエール交換を見ていたら、動作は分かったが声はほとんど聞こえなかった。エール交換をしていない様子的高校もあった。私はエール交換をして当たり前だと思っていたので、甲子園ではこの様な状況になるという事が参考になった。

選手権大会に関わっている人たちの表情、態度を見ると「自分達に関わる事で大会を少しでも成功に導かせたい」と感じ取ることができた。その中でプレーできる選手はとても幸せであると思う。

3. 終わりに

私は甲子園のアルプススタンドに応援として何度か行った事はあるが、今回のようにバックネット裏に座って野球を観戦したのは初めてである。球場のスタンドに一步入った途端に全身が震えた事は今でも鮮明に覚えている。非常に多くの観客、試合をしている両校の応援、グラウンドでプレーしている選手、全ての雰囲気圧倒された。グラウンドの選手を見ていると自然と笑顔になり、伸び伸びとプレーをしていた。引率して下さった先生が「甲子園はどんなプレーでも、選手を輝かせる場所だ」とおっしゃった。私はその言葉や、雰囲気の中で今指導している選手たちを甲子園のグラウンドでプレーさせてあげたいと心から思った。

このレポートでは選手権大会を支えてくださっている人達について報告させてもらったが、選手たちにもこの事を伝え大会だけではなく、普段から支えてくださる人たちに素直な感謝の心を持たせたい。その上でプレーするからこそ甲子園は選手の輝ける場所なのだと思う。

最後になりましたが、東信支部を代表し貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。この経験を今後の指導に生かしていきたいとおもっています。

平成22年度 甲子園研修報告書

箕輪進修高等学校野球部

監督 甕力

今年の長野大会決勝、松商学園高校対松本工業高校の試合となった。決勝戦は、その名にふさわしい好ゲームだったと思う。手に汗握る攻防、これぞ高校野球という名勝負だったと感動した。松本工業高校は我母校である。母校と共に、甲子園に行ける機会に巡り合えたことを嬉しく思えた。

万感な思いで臨んだ甲子園研修。更なる偶然に、また感銘した。連盟常任理事の寺沢誠一先生が研修を支援してくださり、行動もご一緒して下さったからだ。高校時代、甲子園を目指し日々練習に励んでいた頃の恩師である。そんな当時のことを思い出し、純粋に甲子園に憧れていた頃の気持ちもまた蘇っていた。甲子園には、幾度か観戦に訪れたことはあったが、甲子園をこんなに意識して訪れるのは初めてでもあった。もの凄く私の心は躍っていた。

研修中は、長野県高校野球連盟、甲子園大会関係者のご配慮で、普段はなかなか観戦することの出来ないような席を用意して頂いた。バックネット裏のすぐ横である。球場の全てが等身大の大きさであった。監督として試合に臨む時よりも、間近でバッターボックスなどを見ることが出来た。選手の体の大きさや、筋肉の張り、ピッチャーの球筋、スイングの早さも全てが等身大のまま観戦することが出来たと思う。そういった意味では、甲子園に出場する選手や、その技術の高さを間近で垣間見れた気がした。

研修二日目には、バックネット下や選手控え室の見学をさせて頂いた。また、試合前のトスにも立ち合わせて頂いた。両校の責任教師・キャプテン・応援責任者などが呼ばれ、大会関係者・審判さんから沢山の事前指導を頂いていた。その事細かさにも驚いた。また、トスを行う際の主審の話にも感動したことを覚えている。『ここは、甲子園であっても特別な場所ではない。普段やっている野球を、ただ甲子園という場所でやってくれればいい。特別何かをするのではなく、普段やっている野球を精一杯やって欲しい。そして、両校の選手が十分に力を発揮できるよう私も努めさせて頂くが、両校の選手もFの精神にのっとり頑張ってもらいたい』と両主将を激励した。

まさにその通りである。いかに普段の練習から甲子園を意識して行動しているか。甲子園だから、特別なことをする。そんなチームであっては甲子園に出場することはできやしない。その話を聞いていた私には、そのことを指摘されたかのようにも思えた。また、甲子園だからといって特別なことをしてしまえば、甲子園に何か余計なものがついてしまう。選手に望むのは、特別なプレーではなく、今まで培った練習と技術の成果。それを、精一杯発揮してくれれば十分である。無我夢中になり白球を追い掛け、仲間を信じ、懸命にプレーする。私は、大会関係者全員が、高校野球ファンが、そして、甲子園がそれを望んでいます、と主審は代弁したようにも思えたのである。まさしくここは、誰もが憧れる甲子園であることを実感した。

また、その日の午後、球場外練習を行っていた『鹿児島実業高校』の練習を見学させて頂いた。時間の割り当ては2時間程度。私はその間に、どんな練習をどんな目的で行うのか非常にきになっていた。球場へ向かう車中、その練習内容を想像していた。きっと、大会中でもありシートノックを足掛かりに、中継や連携プレーの確認、感覚を保つための手投げによるバッティング、もしくはバンド練習。その後は、多めのノックかフリーによる打ち込み。そんな、感じだろうかと考えていた。

しかし、実際の練習は、手投げによるシートバッティングが中心で、間にノックが適度に入っていた。その趣旨を聞くことは出来なかったが、調整などという甘い考えは一切無いようにも感じ取れた。球場からは練習という雰囲気ではなく、試合そのものようにも思えた。また、選手同士の声の掛け合いも的確であった。送球が胸から反れるだけで、指摘が飛ぶ。選手一人一人が、その重要性を熟知しているかのように思えた。技術の高さもさることながら、知識や意識の高さ、今置かれている自分達の立場までわかっているように思えたのである。まさに甲子園常連校だと脱帽した。

私は、この研修を通じて、ただ技術があるというチームでは到底甲子園には出場することが出来ないと改めて思わされた。必要なプレーを、どのタイミングで、どのような形で発揮すれば良いかを熟知していることや、それらを安定して発揮出来るだけのメンタル面など、そういった幾つもの力が必要であるのではないかと思えたのである。また、その素晴らしい技術力の根元には、絶対的な練習量があったのではと想像させられた。生まれ持った才能や、小手先の技術ではなく、絶対的な練習量から培われた確かな力。表現は適切ではないが、プレーを頭では考えていない。すでに体でその全てを覚え込んでいる。体に野球が染み込んでいるようにも感じ取れた。だから、どのプレーにも無駄がなく、逆に自信さえ感じ取れる場面が幾つもあった。『努力に勝る才能無し。才能とは、努力し続ける力』と言うが、まさにその次元の野球であることを痛感させられた。

甲子園には、多岐に渡り学ぶべきことが沢山あった。その1つを紹介させて頂く。それは、選手一人一人の瞬発力（最大限に力を発揮するまでに掛かる時間）の違いである。これは、県のレベルと明らかに違うところであった。県大会でも、そのパワー、スピード、能力が優れた選手は何人もいた。しかし、最大限まで力を出し切るのに掛かる時間が、やはり全国のレベルには到底及ばないと感じ取れた。時間にしたら、コンマ数秒の違いであるが、その数秒の差がやはり違っていた。そして、この差の積み重ねが、はっきりした力の差になっているように思えた。

甲子園大会、『報徳学園高校』が上位まで進出した。その1回戦を観戦することが出来たが、決して体格のよい選手はいなかった。しかし、全員が早い。ボールまでの反応、一步目からボール処理までの時間、処理から送球までが早くて、本当に正確である。そのスピードには圧巻させられた。全国は、こういった僅かな差が、至るところに幾つもの垣間見られた。そして、この積み重ねの差が全国との差であると痛感させられた3日間でもあった。

この甲子園研修では、本当に多くのことを学び、素直に受け入れることができたと思う。また、自分の野球感を、一層磨き考え直す機会にもなったと思った。今回の甲子園研修にあたり、ご支援・ご指導頂いた長野県高校野球連盟、ご行動を共にして下さった先生方には、心から感謝している。最後になりますが、自身の日記のコメントを載せて、報告とさせて頂く。

日記より

2010年8月10日（火）

甲子園のベンチに初めて立った。名将と呼ばれる数多くの監督や、プロ野球選手がここに立った。また、母校の後輩や、恩師中村監督もここに立ったと思うと、なんだか足が竦んでいた。球場は、もの凄く大きく見えた。フィールドに立つ機会を頂いたが、立つことが出来なかった。自身で拒んでしまったのだと思う。今は、立つ自信がなかった。そんな自分が悔しかった。しかし、いつかは絶対に自分の力で立ちたいと思う。ここ来る自信と力を付け、甲子園に絶対くると誓った。

甲子園研修

松本美須ヶヶ丘高校 菊池吉眞

8月9日から8月11日までの3日間、甲子園球場へ研修に行きました。球児の憧れの球場、憧れの大会を生で見る機会を得ることができ、とても貴重な経験になりました。印象に残った部分を以下にまとめたいと思います。

1 暑さ

初日は雨で第3試合の開始が遅れ、さらに途中に一時間以上の中断を挟むという天気でも過ごしやすかったです。二日目も思ったほどの暑さではありませんでした。三日目は午前中のみ観戦でしたが、日差しが強く日陰に入っても汗が止まらないような暑さでした。長野県では、ここまでの暑さの中野球をすることはほとんどありません。やはり、暑さに慣れているほうが勝ち進んでいくうえでも、重要なことだと感じました。

2 雰囲気

いつもテレビで見ているときよりも、ずっと華々しい雰囲気でした。甲子園球場は最近リニューアルされたばかりということでしたが、スタンドも外装も全て新しくとても綺麗でした。また、アルプススタンドを中心に観客が多く、大きな声援を送っていました。本当に一球一球にスタンドから声援が送られ、ヒットやアウトになればアルプスを中心に大歓声が起こる、という感じでした。想像はしていましたが、実際に球場にいると鳥肌が立つような雰囲気でした。また、二日目の第一試合に出場した砺波工は初出場でしたが、応援の方がアルプスに入りきらずに一塁側の内野席まで埋めていました。まさに大応援団という感じで、対戦した地元報徳学園よりも大きな声援が送られていたのが印象的でした。

3 プレー

シートノックのときから感じましたが、野手の送球が速く、正確でした。内野手のファーストへの送球、外野から内野への返球、どれも速く伸びのあるボールでした。また、広い甲子園球場でも、右中間の深いところから二塁手のカットのみで、三塁へワンバウンドかツーバウンドの返球をしていました。内外野ともに、肩のみでなく全身をうまく使って投げているな、という感じでした。

また、各打者のスイングの速さ、思い切りの良さを感じました。中には140キロ後半の

ストレートと 120 キロ前後の変化球を投げている投手もいましたが、その変化球を右打者がライトの頭を軽々と越えていく打球を打っていました。変化球に態勢を崩されずに強くボールを叩いていました。自分の学校の選手にはこんなプレーをできる選手はいませんが、一つの目標になりました。

4 裏側

普段、立ち入ることができないような場所にも入らせていただくことができました。二日目の第二試合の福井商業といなべ総合高校の試合のトスを見させてもらいました。試合前の両校の主将の緊張した表情を間近で見ることができました。また、甲子園球場の一塁側、三塁側の室内練習場を見学させてもらい、全試合終了後には三塁側のベンチに入らせてもらいました。まさかベンチにまで入れるとは思っていませんでしたので、本当に貴重な経験をさせていただくことができました。

5 まとめ

やはり甲子園は最高の舞台だな、という感じがします。大観衆の見守る中、またアルプススタンドの自校の大応援団の声援を受けながらプレーするのは、選手たちにとっても野球部にかかわる人たちにとっても、これ以上ない最高の舞台だと思います。また、「甲子園には魔物が棲む」という言葉をよく聞きますが、あの中で普段通りのプレーをするのは難しいと思います。普段以上の考えられない良いプレーも出るだろうし、逆のことも十分起こり得ると思います。それも甲子園の魅力だと思います。自分もこの中で野球をしてみたい、と強く思いました。

また、実際に甲子園に出場するチームのプレーを間近で見ることができ、その迫力とレベルの高さに圧倒されました。自分もこの場所を目指して、生徒たちに日頃接していますが、まだまだ全然だめだということがはっきりわかりました。この素晴らしい雰囲気、野球を生徒たちにしっかりと伝えていきたいと思います。

自校のチームと甲子園に出ているチームの差はもちろんありますが、自分自身もまだまだ勉強しなければいけないことが山積みで、もっともっと勉強していきたいと思います。

最後に、このような研修の機会を与えていただきありがとうございました。今後もこの経験を活かしていきたいと思います。